
空白のトキ

木村よし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白のトキ

【Nコード】

N1780I

【作者名】

木村よし

【あらすじ】

優しい×不器用。スレ違いの切なめ話。

恋人同士の俊と亮太。亮太はモテるし俊には佳祐って幼馴染みがい
て…！？

この恋、どーなっちゃうの！？

男の子同士ですが、BL苦手な方でも読んでいただけるとおもいます。

完結済み

17歳（前書き）

初のBLものです。

作品を覗いて下さってありがとうございます！

一言でも二言でも感想頂けるととても嬉しいです！
よろしく願いいたします。

では本編へどうぞ

17歳

『もしもし』

「もしもし…」

『俊？どうしたんだよ、何か暗いじゃん』

「亮太と、もう別れる。」

何度目の別れ話だ？これ。

多分9回目だな。うん。

そしてその全てが俺からという…。

『んー俊？何が嫌だった？』

焦ることなく問い掛けてくる亮太は、もう俺からの別れ話にも慣れているようで。

「…昨日の放課後、女の子と手、繋いでた…」

亮太と一緒に帰るために靴箱の所で待っていると、ゴミ箱を持った亮太と、亮太に腕を絡ましている女の子。正直、女の子が一方的だったのは見るだけでも分かったけど。

何も言わずにされるがままになっていた亮太にもイライラして。

『あーあの時かな。手繋いだわけじゃないんだけどな。』

「亮太が、女の子がいいなら、俺…」

携帯を持つ手が、震える。

『まあたそんなこと言う。嫌な思いさせたならごめん。俺は俊がい
いから。』

電話越しの心地好い亮太の声。

まるで耳元で囁かれているかのような錯覚に陥る。

『俺は、俊と別れたくないよ。』

優しい亮太の笑顔が目に見え隠れ。

「…ん。わかつた。」

『じゃあもう遅いから早く寝なよ？明日の朝も迎えに行くから。』

おやすみと言って電話が切れる。

俺は携帯を枕元に置いて布団の中に潜り込んだ。

俺と亮太は、半年前から付き合ってる。

同じ高校で、同じクラスで。部活まで同じで仲良くなるのにはそんなに時間はかからなくて。

先に好きになったのは、多分俺。
でも告白してきたのは亮太からで。

亮太は、優しい。

ルックスだって良いし、勿論女の子にもモテるし。

だから。

俺の幸せはいつも不安と背中合わせなんだ。

俺は女の子じゃない。身長は168センチで小さめだけど、美少年とかじゃないし、性格だって素直じゃない。

不器用で。

ちよつとしたことで亮太と付き合っていく自信なんてすぐに砕けてしまいそうになるし。

俺は亮太に相応しくないんじゃないか？

亮太はやっぱり可愛い女の子の方がいいんじゃないか？

そんなことを考え出したら止まらなくなつて。

「別れる」

すぐにそう言う俺。

でも亮太はその度に、俊がいいと言ってくれて。

そうやって、俺は安堵するんだ。

あ、まだ俺は亮太のものなんだって。

必要とされてるんだって。

俺はさ、

亮太が俺を見てくれる限り、亮太のものでいたいんだ。

19歳

「なあ俊、今から暇だろ？」

「ん？うん。暇だけど」

講義が終わって夕方の橙色が教室を染めている。

大学生になって初めての夏。

小学校から仲の良い幼馴染みの佳祐が「じゃあ2人で飲みにいこうぜ」と言ってきた。

どうも安くて美味しい店を人から教えてもらったとかで。

「ん。別にいいよ」

確か今日は亮太もバイト仲間と飲み会って言ってたし。

帰っても一人だから、俺は佳祐と飲みに行くことにした。

亮太と付き合い始めてから2年近くが経とうとしてる。

俺たちは別々の大学に進学したんだけど、2人でルームシェアをしてるから、まあ同棲のようなもので、一緒にいられる時間はそんなに減ってない。

帰りが遅くなる日とかはちゃんと報告しあって。正直まだ不安は全くないと言えば嘘になるけど、せれ以上に俺は亮太ということに安心と幸せを感じるようになってた。

「うまい！」

駅の近くにできた広くて綺麗な店内。どうも関西では有名な大手の学生居酒屋らしく、この辺りにできたのはこの店が最初なんだとか。

「ちよっ！俊！このホツケまじ美味いつて！」

そして目の前の佳祐のテンションはマックス。
ホツケに感動してる…。

「佳祐ー。あんま飲みすぎんなよー。」

俺は生中をチビチビと飲みながら苦笑する。
この調子だと酒も飲みすぎて潰れるだろな…

「だーかーらー飲みすぎんなったのに！」

「えへへー世界が回るわ俊ちゃん」

完璧に出来上がってしまった佳祐に肩をかしつつタクシーを拾う。
タクシーの運転ちゃんが酔っ払いを見た瞬間明らかに嫌そうな顔をしたけど、無理矢理佳祐を押し込んで佳祐の住所を伝えてから俺はタクシーから離れた。

小さくなっていくタクシーを見送りながら、俺も帰路につく。駅の近くのアパートを借りてるからここからそう遠くはなかった。

「あれ」

鍵が開いてる…。

ドアを開けて中に入ると、リビングは明かりが付いていて。

「亮太？帰ってるの？」

靴を脱いでリビングへ向かうと、ソファに座ってる亮太がいて。
なんだか、いつもと違う気がした。

「りよ、亮太？今日、飲み会、早かつ」

「途中で抜けてきた。」

静かな亮太の声。

だけど、何故かそれにビクリとなる。

「俊こそ、遅かったね」

「え？あ、ごめ、佳祐と…」

ダンッ！

テーブルを叩く音。

大きなそれは、本当にいつもの亮太と違ってて…

「れ、連絡しなくて、ごめんなさ」

「ねえ俊。」

今まで背を向けていた亮太がこちらを向く。
その目は、いつもの優しい目じゃなくて。

「別れよつか」

え…？

今、なん、て…

「りよ…」

「風呂入ってくる」

俺の横を通り過ぎていく。

俺を見ては、いない。

リビングに一人ぽつんと残されて。

「あ…え…？」

何か、ごちゃごちゃする。

頭の中、俺…。

別れよつか

あ、そつか。

そうなんだ。

俺に向けられなかった亮太の視線。

やっと理解できてきた。

俺は、

いらなくなっただ。

シャワーの音が聞こえる。

その音が妙におれを落ち着かせて。

リビングを出る。

風呂場への扉の前に立って、

「今までありがとう」

小さく呟いた声は、多分亮太には聞こえていないだろうけど。

俺は部屋を出ていったんだ。

23歳く亮太side

会社にもやっと慣れてきて、今日も同僚数人と軽く飲みについて。夜も更け閑散となりつつも、酔っ払いやキャッチなんかが行き交う駅前。

もうすぐ11月ということもあり、夜は大分肌寒い。俺はスーツのパンツに手をつ込んだ。

「？」

駅前にしゃがみこむ物体を発見。
酔っ払いかな。

そいつは一人しゃがみこんだまま動かなくて。
辺りを見回しても連れらしい奴はいないし。
見た感じまだ若そうで。

その小さな姿が、何処かあいつに似てるような気がして…。

あー俺ってば変わってない！
変わらなきゃって思ってるのに！

でも気になり出してしまったら仕方ない。
俺はゆっくりとそのしゃがみこむ男に近付いて行って。

「あの、大丈夫ですか？」

「…え、あ…すみませ…」

のろのろと顔を上げたそいつは、俺の顔を見た瞬間目を見開いて。俺も、動けなくなつて。

「悪い！コンビニ並んでて…さ…」

聞き覚えのある声がして、その方に顔をやる。
ミネラルウォーターを持った俊の幼馴染みが立ってて。中田佳祐つて言つたっけ。

「斎、藤…」

斎藤は俺の名字。

亮太と呼ぶのは俊くらいだったから。

「久しぶり…」

俺の声は、少し震えていたかもしれない。

「悪酔いしたんでしょ？俺のアパートすぐそこだから。よければ来なよ。」

「いや、大丈夫、夫、だから…うつ…」

言いながら口を押さえる俊に俺は、昔と変わってないなんて思つたりして。

「中田も一緒に。お茶くらい出せるし。」

「どうぞ。そんなに綺麗じゃないけど」

ドアを開けて二人を招き入れる。

とりあえず俊をトイレに直行させて。

中田も一緒に入って俊の背を擦ってあげたようで。

出てきたら俊は俺のベッドにそつと寝かせた。

「突然悪いな…」

中田（佳祐）が頭を掻きながら言う。

「いや、誘ったの俺だし。中田は気にしないでよ。」

「なんか今日すげえ飲んでさ。」

二人で俊の方に目をやると、静かに寝息をたてていた。

「なあ、斎藤。」

「ん？」

「なんで、別れようって思ったんだよ。」

中田は真剣な目をしていて

俺の頭に4年前の夜が蘇る。

あの日。

あの夜。

「なあ、なんで」

別れよっか

「…それは」

「俊、あれから誰とも付き合っていないぞ。」

え？

「今はやっと普通に笑ったりできるようになったけど、あいつがど
んどんだけ苦しんだかお前知らねえだろ。」

何言って、

「こいつは、俊は…!!」

「やめろよっ!!」

いきなり響いた俊の声。

見ると俊は上体を起こしていて。
布団をギュッと握っていて。

「佳祐…も、大丈夫、夫だか、ら…。亮太も…ごめ、ね…」

力なく言った俊は、全然上手く笑えてなくて。

俺から先に離れていったのは
俊、お前だろ…？

「ごめん、中田、二人にして。」

「え？」

「ちゃんと送ってくから。」

「…わかった」

「えっ…佳祐…?!」

また明日な、と俊に微笑んでから、中田は部屋から出ていった。
急に静かになる。

「あ、えと…俺も帰…」

ベッドから立ち上がろうとした俊を、俺は再びベッドの上に押し倒した。

「いつ…りよ、た…？」

不安そうな俊の声。

「俺、知らない」

「え…？」

「俺の前から居なくなっただけの俺のこと、俺知らないよ。」

シャワーを浴びて。

イライラする自分を落ち着かせて。

出てきて謝ろうと思ったら、もう俊はいなくなっていて。

「連絡もとれなくなって、大学に行っても会えないし、バイト終わって帰ったらお前の荷物がなくなってる…」

俊の両手首を掴む手に少し力が入る。

「鍵、ポストに入ってた時、俺がどんな気持ちだったか分かんのかよ…？」

携帯の番号も変わってて。

どこにいるかも分からなくて。

いつか戻ってきてくれるって信じて待ってた俺が。
ポストに入れられた鍵。

もう終わりだと。

告げられた瞬間。

「俊は、不安だって何度も言ってた。」

「その度に別れるって、俺は何度も言われた。」

俊の目から、涙が溢れた。

「不安なのは！お前だけじゃないって！なんでわかんなかったんだよ！」

俊は明るくて。

誰からも好かれていて。

幼馴染みの中田は俺より俊のこと知ってるし。

あの夜、バイト先の友達との飲み会の途中、俊と中田が二人で店に入って来るのが見えた。

何も言われてないのに。

酒が入っていた俺は、なんだか無性に苛ついて。

飲み会を途中で抜けた。

「俊に別れたいって言われても俺が傷付かないとでも思ってたのかよ。」

「りよ……」

「けど俺は俊がよかったから、好きだったから、その度にちゃんと言ってきただろ……」

不安なのはさ、俊だけじゃなかったんだよ。

俺だって中田のことすごく気になってたし。

いつか中田に俊を取られるんじゃないかって。

「なんでだよ……」

「なんであの時、お前の気持ち言ってくれなかったんだよ……」

別れよっか

本心なんかじゃなかった。

俺も、ちゃんと答えて欲しかったんだよ。
お前が俺に望んでいたように。

「別れたくないって…なんで言ってくれなかったんだよ…」

俊、あれから誰とも付き合っていないぞ

なんで。

今はやっと普通に笑ったりできるようになったけど

一言で良かったのに。

俺のこと少しでも想ってくれてたのなら、

あいつがどんだけ苦しんだかお前知らねえだろ

なんで俺に伝えてくれなかったんだよ。

「す…き…」

え…？

「りよ…た、のこと…すきだった、から…」

涙を流しながら、それでも俺を見つめる俊。

「りよう、たが、俺のこと、いらなくなっ、たら…邪魔に、なりたく…なかつ、たから…」

俺の下で震える、小さな身体。

「好き、だよ…！ごめ…今、も…りよ、た、が…好き、な…んんっ」
もう、我慢できなかった。

「りよ…ふあっ…んっ…」

俊の唇を奪う。
貪るように。

混ざりあった唾液が、俊の顎を伝って落ちた。

「はぁ…亮太、俺のこと、いらなくなってない…？」

「んな訳ないよ」

この4年間。

俊を忘れられたことなんてなかった。

「俊は、俺と離れたい？」

俺は俊の頬に触れる。

「…や、やだ！亮太と離れたくない！」

ギュッと、俺の首にしがみつくように腕を回す俊。
俊の素直な気持ちと、その温もりがなんだかすごく幸せで。

「また一緒に暮らそうか」

空白の時は埋まらないけど。

俺たちはきっと、今から誰よりも密な時間を過ごしていくから。

おわり

23歳〜亮太side（後書き）

お久しぶりです、木村よしです。

最後まで読んでくださった方、ありがとうございます！

今回は初のBLものでして、次は女の子同士か近親相姦ものを…と目論んでいます（笑）

切ない ハピエンを目指して書いてみました。

切ないって難しいですね…。

一言でもなんでも良いので（それこそ「読んだよ」だけでも）、何か感想などを頂けると本当に嬉しいです。必ず返信させて頂きます！よろしくお願いいたします。

では

「空白のトキ」を読んでくださって本当にありがとうございます。これからも木村よしとよしの作品たちを暖かく見守って下さい！

木村よし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1780i/>

空白のトキ

2010年10月13日15時38分発行